本阿弥孝悦信徳所感之文

頃は元禄のころとかや、本阿弥某といへる或時信徳
の国々を遊歴しけるに、比は冬の末つかた、嵐烈しく、ふる雪の
雪高く積りて、独道を求め行くが、[illegible]宿
乏しくして、[illegible]宿を求めけれども、里へ出て
[illegible]道と遠く、心細さ[illegible]
ども此野[illegible]と心
細く行き[illegible]一軒の百姓家の見え
ける[illegible]内より老人一人出て[illegible]
[illegible]孝悦[illegible]

[illegible]を立てこね[illegible]孝行の
[illegible]老[illegible]し[illegible]
[illegible]孝悦[illegible]
[illegible]孝悦[illegible]
[illegible]孝行[illegible]
[illegible]老[illegible]
[illegible]
[illegible]孝悦
[illegible]雪[illegible]
思ひの[illegible]孝悦

中々に秋出て、しらしとよ風へ人間にいでんとせしを
新宿を将軍家にこそ随ひ行かんとて、何をもさしてゆく
行々今年まで漸々雪の中に何事か此山中
さんゆう体をしつらひ、妻を心ざし、近々偏に思ひ
歳も暮れて、はや秋立ちて、妻剣御二
人の宿もなく心を晴らし、我身も後に遥々しおひ
妻も嬉しと共に月日を送りて静に遊び暮らしゆく
ずしも妻を思ひて物ごとにつけし云も正しきの
思ひ行く年新たにして、幸便も見るに付けて旅
の身も鄙に至り都を思ひ立ちさらば志

けふは其家所の病もまづ一家を持て是孝
とこふ命ひ、わかれ侍らんか惜き世の中を
よろこびまつ孝の道を守り、雪の所を惜み給ふこと
月積りて中も正しく孝も去りて其身を
まなび勝りて二つもなきこの人は、浄物を重み
しらで言は孝もまなびん心を感じ給ひ
見て今病をもつて孝行を云も、まなび
たまひ給ひて誠の心に立てて孝行を命を云
これを親を嫁も常に家も名をなしてあつまりて
一族の力は是正しく忘れず先祖をかへしむ

ゆづり給ひ家督相続せしが家系の和歌
かるる門代 [illegible] 其の面ぶせ [illegible] と来
其日の折柄 [illegible] 先年 [illegible] 足利ひ [illegible] トキカ
遠祖 [illegible] 義正清と [illegible] 折柄 [illegible]
[illegible] 家系 [illegible] 心 [illegible]
[illegible] 元 [illegible] 力 [illegible]
歩 [illegible] 奇 [illegible] 和やせし
[illegible] の [illegible] 刑 [illegible] 河 [illegible]
[illegible] 今 [illegible] 頼 [illegible] 思 [illegible]

[illegible] 歩 [illegible] 思 [illegible] 栃 [illegible]
[illegible] 思 [illegible] 是 [illegible]
[illegible] 刑 [illegible]
[illegible] 前 [illegible] 刑 [illegible]
思 [illegible] 奇 [illegible] 先 [illegible] の中 [illegible] 足
の志 [illegible] 錦
[illegible] 義 [illegible]
[illegible] 年 [illegible] 兄 [illegible] 考
[illegible] 清 [illegible] 有 [illegible]
思 [illegible] 心 [illegible]

思ひ根是何にかに依りものと云て是を定と
云ならは只祈るしかなきをかし和らけて思ひん
志のこゝろよ心を無縁にも願はゝ其念の誠
依りものとしてつゝ祈る事を深く家か為和らかなり
いかにせましと思案しつゝよふにこれは主
の念ひ御是正路の正宗也浮ひ定と行く
切に利祈弟信のかきんと一統に穏のえ
まの哀は古事記一首書にて定まる
深ゆけ心祈の旅まかへと思ひ年や是
と諸ゆらひこそ有記しと神載をたちまに

餘ひ思ひのちまが哀書のうた歌を
信浅き侭何なりとも山のまに和歌代
短きはゝとてもなかなか思ひ出　章仮
新穏に伝しかは心しこゝろ迄急せし絶ゆ月おもふ
しらしる雪も止ます届も共にあはれにとも結ひに
晦て今け是をの言葉遣へて斜に誠を
物かる事にて是を思しかと事に
そゆかゝ是を風のひつのかに楽もかる事に
前後へとなし事にの事も送る事に落ゆ不致
とあらて是縁あるまも家の様に伝けしとも新

章候と月と経て東郷の御府にて
対軍の御心間大河内将軍に御懇意
章候と近き事なれば其方是を親しく
さとり面白き陽性にて御ゆんと上意の章候器
さんの所望を不望の御遠年是有と
さしく諸事無之或信濃守殿
しに付の御面白く御修行の深の義
まくさを新に信しやと御所やと
軍是と御こと面白き事なれば将
御の御心間と是も其方共の修行と
御為なれば御別れ章候も御信
将軍列御供の章候にて御遠ひ
まりの四方のごとく敬と御義仕
と是も是御修行章候と
御義の上三つ在の百姓
居に御服と
御年令御年と童子と
東海道章候御
郷の御出御修行御服

西京の牛飼と窮鬼事

肥後の国熊本に独の身躰有者て
ゆとかしや出家之ま其のもの人をもとも田地田畑
野をも持し多かし家財積持ゆゑ牛馬も
多くもいし数をもまし山林も多く有し是成
薪木に伐出しひく人も用しゆ河岸出して山は宅
多く厨を成に其の保骨の牛ゆゑ是を殺しらく
ゆ是と若を逢ぬ其牛も用ら別の年に数もて
自然と其を宿もつ怪今牛飼何ゆら牛
もとら家に其ゆ宿の山らと牛飼すゝまつる新木

を骨肩ふつ語か離ぬ物しらりゆかぬ牛牛頭
能当りつ皆目を以つか近を数ら不幸にあり
あまかえか近き牛数を出しも以て身を責き
あをゆらりしと当りゆ牛飼牛以て多く発
何をとらつ打あれしかへぬつ逢しかど目を
ゆつ物りと蓄果つか皆逢ひか狼気をさらとも
牛を馬と逢つぬ中も是をと出て出かし逃ゆ
あらつ海かれり何究牛の尻の何をの
肉を結ゆ其か狼を何をぬしつ牛飼つらら
是をゑひのもとき牛を逢ぬ條しと若を

ありきたりの独になかなか牛王の前にありける
あるとき此眼を見開き角を逆立いかりをなし
出たる牛飼おそれて隠れこれを見て牛の中へ
おのれを養飼て去つると猛狼一ツ飛掛り
何を切以てとしも無程飛掛りのさ牛の討牛飼も
これ竹の先に訴(?)行に撫ていつれも末の狼を
角にかけ一声吠ける其跡にさかし飛のこと
遂に姿を見失ひ御許を思ひてはやく
山を分かけ寺のもとに深の前に御覧ん是を
この事はかなきにや牛飼もて物を除て見えける

今迄なし御免牛のやうなる有様の狼を角
ここに志あと押へ付狼もさすがにのして大声をあて
出しつつイトミ戯に有様牛飼を見えてさき
然るうちにもさせて事と終りつ刀をつけ牛や負
ふかく負けてはそれを御そへつのりぬけれは是に力や
終わりりんてと一声さけ起つてあへなく狼も寒死し
牛飼とらへて首をかけつ尾をも狼の足をよとと
云恩牛の恩に牛飼そ聞てこれしと礎の所へ
振かかりなちこちと打牛をつれた尾の所へ連き
危うき斬のかし無き後をして有様打て持狼

目前に二度つき行ぬる時かりうる手を應へて直せし故ん
然ともも其術の手習年も未生新来と附く無
進退自由成りぬ他とも知らし若へとかきのへて結付と
後の稽古を務しなんかさし正くし日本の徳
成りと将も亦も其の子と而りと思ひを利

貞丹二郎松園一郎の筆

若の貞丹二郎松園生年の園一郎と云志何
然りの新節を集まる書文の風流の年
の齢を学ぶ傳統へし印り来二度ありり
好くて誇詩謝諸と尊しにしてまと好の北斎ニ

好く作りし素白なり気しかりでそ園ぬりすこの
一印りし中の上よのなり自然と勝心が深く中して
若の行なんも残の名りて傳筆にして頼りし当代
海内の私なん物と成徳元の名の園元をるる退
須しも書の中白ありそ嵐米傳の筆物とき
同じうの股引師手奇代の様の榜笠昭徳
の袋て肩の中げ是の某の物と例へちとの傳
同し便へし元の計作けの心成名そ或
暗の龍と有そこね野の傳よの保存し一つ術
目かと角し東郷女の浅草近辺の逆ひ来て

の翁つゐにまつを芭蕉翁に奥州行脚の無名庵を祈りて其
頃中に紀行の序文も書かしめつゝも
小阡芭蕉庵に詣ふと門人等の弟子[illegible]
と残りし芭蕉つゐに一節を心に思ひ寂[illegible]に[illegible]
是[illegible]とも[illegible]籠[illegible]有[illegible]云[illegible]
[illegible]とも中に籠をも叶ふまじ[illegible]
[illegible]ども[illegible]に[illegible]ちとの[illegible]
[illegible]せんが[illegible]に[illegible]も[illegible]まもとゝめて
[illegible]しつゝ[illegible]と[illegible]雪つと[illegible]
[illegible]と[illegible]つ門[illegible]の屋根[illegible]是も[illegible]

[illegible]の[illegible]かと[illegible]ひまつしく[illegible]を[illegible]
新[illegible]今つ[illegible]の[illegible]も[illegible]
[illegible]しの[illegible]雲
[illegible]の[illegible]
一節[illegible]同[illegible]日に[illegible]
[illegible]の[illegible]も[illegible]日
[illegible]の[illegible]も[illegible]是[illegible]
[illegible]地[illegible]
雲の[illegible]
[illegible]つ[illegible]

雨止て雲退て元の空に戯れしごとく世の中に有ても
あらん蓄へ甚迷惑なる新しき顔をして藝師が如く
川の穢れを見返りて同じ様に浮れ有て長流
新たに涌きて思ひ有ても一節に首を傾けて足を悪ひ
淋漓の道傳へられん淋しき浪の中に淋しき人の都と
如何成る所にて一節に作り出しける中に足を添
聞かる道傳へ淋漓御前の素早く佐渡とい
臓蔵に貢けしを二三の兵の心の底に留めて其
上の雲の鏡を二つ足を延せて皆道傳の極めん
まの空に淋漓に知かす聲さへも首へ申して心の

悪をあはびや雨しく其を引きひかんて志を戯
と勝の向勝の釜の内言聞る音のかみ也あなと夜
内甘なるく一佳玉将を衣の事也と手甚しき一節に
家々に東若波り波の志なり仰年花も山も言詞
なり一つあり淋りおもし近ゆ形をと其もの
其内生かさる志を新と高き心の中に
歩き道傳へ通せしは少を一節に心に志す
あり其もの州の淋あるまての志也なを思ひ
其が席其に付んと志ひの書は長流の茂兼
初對面に行年有光其が一節の首根を見るに

年至しぬるを越して あらいづれ念仏の功徳をと
着して いつもおろかなりつゝ あらふ中に御行の
身にとまりし小見の勝観の持を思ひても いかにも
眼の内にも見聞しても[illegible]も心を[illegible]ても
[illegible]事なく仏恩を[illegible]よ法師法然を仰ぐんと
弟子と迎へ菓子をとりしてもいつまでも[illegible]
[illegible]慥かなる[illegible]内に[illegible]トク心法[illegible]
[illegible]つかまつり指南請ければ[illegible]
[illegible]本願念仏[illegible]を[illegible]首[illegible]
甚[illegible]のそのぞきを[illegible]

志ありて[illegible]一念[illegible]一念ずしてあらわれ[illegible]
本願念仏[illegible]見て[illegible]心ずと[illegible]
[illegible]勝念[illegible]口向ひ[illegible]念仏つまれ[illegible]
一念ぞ心[illegible]見[illegible]念仏の心[illegible]
心定[illegible]心ならず[illegible]ても我
[illegible]法[illegible]ても[illegible]
[illegible]思案を定め[illegible]念仏つまり[illegible]
[illegible]長[illegible]念ひとつ[illegible]
自[illegible]首[illegible]御念[illegible]
[illegible]中[illegible]聞[illegible]を[illegible]んと

兄弟る左右に並びし一門何がし行脚と会して又
別なりけるに然れば一つ屋も書をおかれしが
首なる一節を作りたるにと仰ける有の肩など
丁とあり也一節を知らんと思ひけるを人
しと其が俳に記とて打ちたる師にて
とも師ならし鉄割をもちて其筆をもて紀綱
の如くなりしと独り病中つひの辞を長流
兄弟て一節の側に寄りし独自なるを遺
みえし也まの寿ならざる一節とも三度ても
やさしき思ひ俳集とする也て居らず家

行にはやの色まで訪の知ることを帰りぬ
やさしき也一節も今まで知らせぬる一節
かれ家をも行脚しかれ新たの色まで家に居て
湖淵ての師の新たまで御暦まてちと噂とも千年
中ゆかりて鉄器国に僧なり也まて一つの草葉を
めでたしと新たなる佐前にひめ新たに越ひ萌ゆる
詠まれて金も知るをあしたかし師を志ての其
ゆかりと知りまて名なりて一つ年をも経る側に
伴の影の中までゆかり詞をなかりける其門
長流なる也まて一節にむかひ経るの所なる頼るき

入ると初て祈と告て[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

門前に高野の山桜年々咲き重なりて三年を経たる桜樹
なれども今年は花開かず門を通る人々
ちらほら咲けば門前の人々退散なす
日と暮れて門内に入れば新しく門を建て
のものなれども門の前に立ち寄り門を敲く
歌舞伎の陽生花を振りと家の門を敲く
門を敲く一部の者と門内
側と称し門内の者は門を敲く一部
も是と称し門内に住む者は門を敲く
家の者や三郎右衛門殿の門を敲く

そうこうする内に家の者は驚き
青鋼より門を開かんと欲し
門を開かず
門内の者は門を敲く
門内の者は門を敲く
門内の者は門を敲く

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ゆきゆき遠国の方へ行かれそうろうに付き、其月も
至りと行かれし時、花の園一帖をこうじて
退くべき事なれども、猶予の間、思ひ新たに
古今の新しきも是を若の内を選び
もちて庭訓とし、家伝も傳へとひ新古今の
内選ばるべきの旨の得も是を其ごとく武
相の者共に教へ、一巻を教へんと思ひ
ざるべからざる時、此の新古今を教へ
ても役
なりと云へども、是を宜しく若き人
も学問すべきと新古今を教へ
人の御所へ参りてなりとも元の命を
有りと思ひ、新古今を
常の内と云へども、古今の命
陽の命にて、仮名の序
八代集なりと、歌ひ一首の
降り、拝領の内、力者の法
と、ひとへ新古今の内を一帖を
心得の仕方と須へ新古今を
きこしめすと、其月の内、信濃と須
其月の内、一帖を教へ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

信濃國の猿人

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

當長の所[illegible]是と[illegible]信雅を[illegible]下
[illegible]
常の所[illegible]成[illegible]當時[illegible]
是と[illegible]側に付[illegible]
[illegible]信雅の[illegible]
[illegible]信雅[illegible]
何[illegible]
[illegible]信雅[illegible]
見[illegible]是る[illegible]師[illegible]
[illegible]信雅[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

信雅ちひと逝去　是歌仙　[illegible]

[illegible]

[illegible]

信雅[illegible]

年毎[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三貫文の代金を書添て屋敷と云新田の内と其
ぐ三浦迄〳〵風流斎と相ゆずんと思ひ〳〵表
者共吟山風流斎今世界の利を謀ん為と
云世俗事有り是を今の世〳〵市の人物考
見ると有るみ〳〵是の記録と利異り何も
考り上ると〳〵前と違ひ迄の例形り
仕作〳〵吟作り〳〵利と謀る曲ふ〻一条私
〳〵是を迄〳〵ふ〻ふる事ゆ〳〵しねんと
云つ〳〵少仲の様な少サる記録のあつを云
ひふ是を〳〵も書ゝと作りひす〳〵
風流斎吟山利と謀る曲ふ〻是と
もあるの側迄表云ゆ〳〵為まるゆ〳〵
山作の書吟風流斎の弱つ是
ふの内の子を有〳〵是山ひ是と知せこの
内の子を屋山ゝ是山ゝ〳〵ゆ〳〵
記録の是〳〵の利ゝ〳〵ふ〻ふる
右の内の子の天〳〵山利と仕作ると
記録の書吟ひ利と謀る世作のざを記録
書わゆ〳〵ふ〳〵ふ〳〵金ゆ〳〵記録
謀つ〳〵利と謀ふ山の書ゆ〳〵

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

四角に水をもし[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

云

○[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

本草雜記卷之或終